青少年赤十字
JRCふくしま

第一ブロック青少年赤十字指導者研究会

令和元年九月十日・十一日　福島市立福島第一小学校

第一ブロック青少年赤十字指導者研究会を終えて

青少年赤十字福島県指導者協議会長
福島市立福島第一小学校長
粠田　祐子

九月十日、東北・北海道及び県内各地から八十名を超える御参加をいただき、令和元年度日本赤十字社第一ブロック青少年赤十字指導者研究会が、本校で開催されました。当日は、厳しい残暑となりましたが、学校経営方針説明・授業参観・事後研究会・全体会と、参観者の皆様に積極的な御参加をいただきました。特に事後研究会におけるグループ協議では、各地区会長の皆様にファシリテーターをお願いし、参観者の皆様から貴重な御意見を頂戴しました。さらには、指導助言の先生より、子どもたちの主体性を促す観点から適切な御指導をいただきました。本研究会の開催にあたり、御参加、御指導、御助言をいただきました全ての方々に心から感謝申し上げます。

今回の研究会は、本校にとっても、教職員がこれまでの学校運営を振り返り、成果と課題を共有し、授業における主体性の育成や子どもの表現力を高める継続した指導のあり方等、さらに、子どもたちを成長させていく視点をいただく学びの機会となりました。

青少年赤十字の活動は、特別なことを行うということではありません。本校の取組も特別なものではなく、子どもたちの主体性を高め自立を促す働きかけそのものが、赤十字の理念とつながっていると捉えています。

これからの予測不能な社会を生き抜く子どもたちには、多様性を尊重しながら自分たちの問題に気づき、自分たちで解決し、よりよい集団生活を作り上げていくという態度が重要になってきます。よりよい社会や学校生活を創るために、人の気持ちを推し量りながら、課題に気づき、どのように行動したらよいか考え、自分ができることを、自分から人のため社会のために実行していく態度を身に付けることが大切です。

今回の研究会を通して教師の待つ姿勢や指示のない生活、注意深い生活、先を見通す生活、自分から考え行動する生活を実現するしかけや、人道の精神に基づくやさしさと思いやりの心を行動で表現する働きかけを、授業はもとより学校生活全体を通じて実践していきたいと改めて感じました。

これからも本校の伝統を継承しながら、人間性豊かな子どもの育成をめざした質の高い学びを求めて、教職員一丸となって教育活動に邁進していきたいと思います。

編集発行
青少年赤十字
福島県指導者協議会
日本赤十字社福島県支部
〒960－1197
福島市永井川字北原田17
TEL024(545)7998

人間を救うのは、人間だ。
Our world. Your move.

子どもの力・可能性を高める教師の『待ちの姿勢』

福島市立福島第一小学校
教諭　柴田　淳平

「教師が変われば子どもも変わる」この言葉の本当の意味を自らの身をもって学ぶことができたのが今年度行われた、青少年赤十字指導者研究会及び授業研究会でした。

六月三日、公開当日の指導助言者でもある福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター長 宗形潤子先生を迎え、授業研究会が行われました。事後研究会において、宗形先生から「この学級には、子どもたちが自ら学ぶことができる基礎ができています。あとは、担任の先生が子どもを信じ、待つだけです。」と御指導がありました。その言葉を受け、私は「子どもたちを変えるのではない。

変わるのは自分だ。」と気付かせて頂きました。

九月十日、子どもたちは、自分の宝物を相手に伝えるためにスピーチの内容・仕方をより良くしたいという意欲をもち、学習に取り組みました。その姿から、「自ら気づき、考え、実行する」というJRCの理念が体現されたように思います。何より、子ども自らが自身の課題を捉えるとともに、課題の解決方法を模索する中で、友だちと協力をしてスピーチする力を高めようとする姿に、目の前の子どもたちの持つ「本当の力と可能性」を感じました。私自身も、その姿から「子どもの力と可能性を信じて待つ」ということが何よりも大きな支援であることを学びました。

日々変化し、成長し続ける子どもたちにとって、学校教育の中で担任の存在や関わり方が何よりも大きく影響をするということを改めて考えさせられました。教え込み、理解させ、覚えさせようとすればするほど、子どもたちの学びは受け身となります。子どもたちにとって「学ぶ楽しさ、学ぶ意義、学んだことの成果」を実感させるには、子どもの主体的な学びが必要不可欠です。その学びを支えるのは、教師が課題の本質に迫るために様々な視点から問いかけをし、子どもを「信じて待つ姿勢」であるということです。私はこのことを目の前の子どもたちから学ばせてもらえたと同時に、この子どもたちの担任で良かったと幸せな気持ちを感じることができました。

子どもと教師の成長に関わる取組として

福島大学人間発達文化学類附属
学校臨床支援センター長
宗　形　潤　子

第一ブロック研究会では、まず、子どもたちの認め合うことができる関係性のよさが挙げられました。相手に関心を持ち、思いやる心は青少年赤十字の指導理念として大切にされていることです。それが子どもたちの自然な姿から見られたことは授業だけでなく、普段からの積み重ねの賜物であると言えます。また、「先見」の効果についても話題となりました。このような子どもの姿を目指していくためには、柴田先生のように掲示物等により子どもにとって目標が明確となる支援をしたり、教師が子どもを丁寧に見取りその思いに寄り添ったりすることが重要であることが話し合いの中で明らかになりました。全体を通して、参加された先生方からたくさんの意見を聞くことができる場となりましたが、それも一重に子どもたちと柴田先生の姿に心を動かされたからであると考えます。だからこそ自校に持ち帰り、生かすことができる取組であったと思います。

青少年赤十字が学校に与える影響とは何か、学校教育と青少年赤十字との関わりとは何か。このことを問いとし、今年度福島第一小学校の授業における子どもたちと柴田先生の姿、そして第一ブロック研究会に参加することで今まで以上に明確に見えてきたことがあります。それは、青少年赤十字の理念に基づく活動は、子どもたちと教師を大きく成長させるということです。本来子どもは、自ら考え、自らの意志に基づいて動くことができる存在です。しかし、どうしても決められた時間や内容を効率よく学ばせようとすると、教師の意図に基づいた活動ばかりとなってしまうことが見られます。しかし、柴田先生のように青少年赤十字の理念を学び、それに基づき授業（生活全般も含めて）を変えていこうとすることは、子どもの本来あるべき姿とするための教師の働きかけの変化につながっていくということを実感することができた学び多い時間となりました。

聞くことの大切さ

福島市立福島第一小学校
石井美智子

本校の子どもたちは、青少年赤十字の態度目標である「気づき、考え、実行する」を合言葉に、長年ＪＲＣ活動に取り組んできました。今年度、第一ブロック青少年赤十字指導者研究会及び授業研究会での授業公開をお受けし、授業における気づき、考え、実行する児童の姿とは、一体どういう姿なのかを改めて考えるよい機会となりました。

七月二日、当日の指導助言者である「白河市立信夫第一小学校長　木村真一先生」と「青少年赤十字指導講師　土屋悦男先生」をお迎えして第一回の授業研究会を行いました。「気づきを促す課題づくり」「子ども同士の関わり合い」、「振り返りの積み重ね」など、授業づくりのポイントを示唆していただきました。

その中で「学校生活で気づき・考え・実行する姿勢が育っていないと授業でも主体的・対話的な姿は見られない」という言葉をお聞きし、普段何気なく行っているＪＲＣ活動の価値を授業中の子どもの姿と関連付け、教師が意識して子どもに関わり、称賛や価値付けをしていかなければいけないことに気づかされました。

それから自分自身の授業改善が始まりました。特に大切にしたことは、子ども同士の関わり合いの質の向上です。

友だちの話を聞く心構えはどうか、話す側は相手に分かりやすいように話しているだろうかなど、そのような視点で子どもたちを見ていくと、普段教師側が何を大切にして関わっていかなければいけないかが見えてきました。そして、みんなで話し合い、課題を解決したという達成感が何よりも大切で、そのために子どもたちの「聞く」姿勢が土台になければ成り立たないという、当たり前のことに立ち返ることができました。

授業中だけでなく、日頃のＪＲＣ活動でも六年生の子どもたちが下級生の話をよく聞き、みんなで一つのことに向かっていく姿が育ってきています。「聞く」ことの大切さを、子ども自身が実感していけるようこれからもかかわり続けていきます。

青少年赤十字を活かす「教師の姿勢」を考える

白河市立信夫第一小学校長
木村真一

九月十日、残暑厳しい中、福島第一小学校において開催された「第一ブロック青少年赤十字指導者研究会並びに授業研究会」の六年生授業の指導助言者として微力ながら参加させていただきました。

七月二日の事前研究会時にも増して当日の授業では、担任の石井先生と児童たちの笑顔や学級の雰囲気から、深い信頼関係で繋がっていることがすぐに伝わりました。本校の校訓「終始一誠意」を基盤に、一誠の教育「誠実で人間性豊かな子ども」の育成のため、ごく自然にそして深く青少年赤十字の理念が学校全体に根付いていることに深く感銘しました。

事後研究会においては、本時まで悩みぬいた授業者への積極的な質疑と活発なグループ協議とで、限られた時間の中でとても有意義な内容となり私にとっても大変勉強になりました。

青少年赤十字と算数科授業のあり方という狭義の視点では、直接的な論点としては上がりづらいところですが、私からの指導助言として、青少年赤十字を学校教育に活かすための「教師の姿勢」のあり方という視点から、教師の「先見」や「待ちの姿勢」などを踏まえた、算数科における教師の「しかけやコーディネート」（西白河地区の算数研究推進校の資料から抜粋したもの）という方法について参考にしていただきたく触れました。

ところで、青少年赤十字を活かす「教師の姿勢」とはどういうものでしょうか。「算数科授業のための『教師の姿勢』はどうあればよいか」の追究では、児童自身に「気づき、考え、実行する、振り返る」態度はよりよく身に付かないと考えます。教育活動全般にわたる一貫した「教師の姿勢」であるからこそ、算数

科を含め普段の授業における児童の主体的な態度が育つものと考えます。

しかし、この「教師の姿勢」のあり方が学校教育に青少年赤十字を活かす最も難しいところではないでしょうか。年齢は勿論、実績や経験、個性も多様な先生方なのですから考え方や感じ方も多様です。「何を具体的にしたらよいのか」「待ちの姿勢は、回りくどいし時間がかかる」という先生も多くいることと思います。

そこで、青少年赤十字の価値という原点を改めて捉えることが必要と考えます。青少年赤十字の三つの実践目標や態度目標には「人道」の精神という崇高で普遍的な価値が根底にあり、まさにその実現は学校教育の目指すところと言えます。

この価値を踏まえ、「教師の姿勢」はどうあればよいかを教師自らに問い、変化を怖がらず、情熱と工夫をもって挑戦し続けることが、「教師の姿勢」なのではないでしょうか。

令和元年度 青少年赤十字指導者中央講習会

令和元年十一月二十三日（土）　場所：日本赤十字社

青少年赤十字は学校の宝

相馬市立飯豊小学校長　永峯秀桐

「『青少年赤十字は学校の宝である』子どもたちの自律の力をつけるためにはとても有効である。しかし、宝は磨かなければ光らない。光らせる努力をしなければならない」今回の中央講習会に参加して、強く心に残った言葉の一つです。青少年赤十字の目的及び態度目標「気づき、考え、実行する」は知っているものの、どう「やさしさ」や「思いやり」の心を引き出し、主体的に行動できる子どもを育てていくか、足踏み状態の私を強く押してくれるものとなりました。まずは、子どもたちの主体性を信じよう、発言力や行動力を信じよう、その心をもって取組を始めてみようと意識を変えるよい機会となりました。

今回の研修会のテーマは、「いじめや不登校について青少年赤十字ができること」でした。飯野眞幸高崎市教育長様の講演は、繰り返されるいじめ案件の説明から入り、詳しい内容を聞く度に最悪の事態になる前になんとかできなかったものかと、身につまされる思いでした。

話のなかで、「いじめを防ぐためには、いのちの大切さを育む力・思いやりを育む力・自主性やリーダーシップを育む力を青少年赤十字の売りとし、いかに学校教育の中で青少年赤十字の取組を活用していくかが大切です」とおっしゃっていました。また、いじめ防止プログラムの柱は「校長が汗をかくこと」「子どもたちと一緒に活動すること」と強調されていました。

青少年赤十字という宝を磨くためには、校長が傍観者的な立場でいるのではなく、教職員とともに力を合わせ智恵を絞り、子どもたちの気づきの力を高めていく必要があります。そのために気づきのしかけをつくったり、待つ姿勢を共通認識としてとらえたりすることを大切にしていきたいと思います。よく観察していくと、よい気づきや行動をしている子がたくさんいます。私たちはその姿をとらえ、よいと思う感性を磨き、子どもたちに広げていきたいと思います。とてもよい刺激を受けた研修でした。

令和元年度青少年赤十字指導者中央講習会 日程

	プログラム
9：00	
	受　付（15分）（9：15～9：30）
	「開会挨拶」（5分）「オリエンテーション・アイスブレイキング」（25分）（9：30～10：00）
10：00	「青少年赤十字事業の取組と長期ビジョン」（40分）（10：00～10：40）
	（10分間休憩）
11：00	講演「青少年赤十字と人道的価値観の普及について」（60分）（10：50～11：50）
12：00	昼食　各自（60分）（11：50～12：50）
13：00 14：00	講演「いじめや不登校のない学校づくり」（110分）（12：50～14：40）
	（10分間休憩）
15：00	事例発表①、②「いじめや不登校について青少年赤十字ができること」（各20分）（14：50～15：30）
16：00	「グループディスカッション」（80分）（15：30～16：50）・導入説明&ディスカッション【テーマ】いじめや不登校について青少年赤十字ができること
17：00	情報共有（30分）（16：50～17：20）
	事務連絡（10分）（17：20～17：30）
17：30	解　散

青少年赤十字作品募集
『詩』・『100文字提案』

青少年赤十字作品募集は「青少年赤十字活動の活性化と意識を高めること」を目的にして、平成十八年度から今年で十四回目の募集となります。平成二十四年度からは、海外の赤十字から寄せられた救援金で行われている「東日本大震災復興支援推進事業」の一つとして実施されています。

今年度は五十四校から三千四百三十九作品の応募がありました。審査は予備審査から第二次審査まで延べ六十数名の審査員の方々により、作品一つひとつに込められた皆さんの想いを受け止めるべく慎重に行われ各賞が決定しました。

今年度も積極的に応募頂いた学校、適切なご指導を頂きました指導者の方々、進んで応募頂いた児童、生徒の皆さんに感謝と御礼を申し上げます。その中から、四名の皆さんの作品と感想を紹介させていただきます。

社長賞 ふるさとの空

郡山市立富田中学校　一年　志田　柚季

今年中学生になった私は、あこがれの吹奏楽部に入りました。中学校生活は予想以上に忙しく、部活は同じような基礎練習が続く毎日。そんな時、練習中の窓から広がる青空を見るだけで「あともう少し」と、気持ちのスイッチを入れ直す気分になるのです。

福島で生まれ育ってきた私は、ふるさとの様々な表情を体感してきました。私にとって福島の澄んだ青空は、いつでも身近で思い出を鮮やかに蘇らせてくれる、特別なスクリーンです。

日本赤十字社 社長賞
「わたしのふるさと」
郡山市立富田中学校　一年　志田　柚季

私は吹奏楽部。
練習に励む三階の教室。
窓から、抜けるような青空を見る。
西会津のキャンプ場や磐梯山のゲレンデの空。
楽しい思い出が蘇る。
この美しい福島の空を感じ、
今日も私は、クラリネットの音色に想いをのせる。

大切なこと

学校法人松韻学園福島高等学校　一年　紺野　美礼

東日本大震災は、自然の力と恐ろしさを感じるとともに災害が起きたとき、本当に大切なものは何なのかということを考えさせられた経験でした。あの地震が起きたとき、祖母が私の手を握ってくれず一人ぼっちでいたらどうだったでしょう。ただ怖くて不安でその記憶だけが心に深く刻まれたと思います。災害が起こったら、もちろん支援物資やボランティアが必要です。でもそれ以上に、安心できる人のあたたかさ、家族がいる安心感、「大丈夫」の一言が大切です。それだけで心が落ちつくと私は思いました。

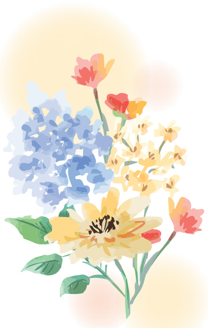
日本赤十字社福島県支部長賞
「わたしが感動したことばやできごと」
学校法人松韻学園福島高等学校　一年　紺野　美礼

東日本大震災の日、地
面が大きくゆれて、当時
小学一年生の私は怖くて
怖くて泣いた。
そのとき左手がぎゅっと
温かくなった。
祖母の手だ。
はなれないよう私も
ぎゅっと握った。
祖母の手は今でも温か
い。あのときの手だ。

おばあちゃんのぬくもり

須賀川市立阿武隈小学校　六年　岡部　広哉

夏休みに母と一緒に祖父母の家に行きました。久しぶりに会った二人は、大きくなった僕を見てびっくりしていましたが、僕も二人が小さく見えて少しびっくりしました。おばあちゃんは僕の大好きなざるそばを作ってくれて、僕はおいしくて夢中で食べました。おばあちゃんは「恩返しはお母さんにしてね」と言うけれど僕はやっぱりおばあちゃんにたくさんの恩返しをしたいので元気で長生きしてほしいと心から思いました。



青少年赤十字福島県指導者協議会長賞
「わたしが感動したことばやできごと」
須賀川市立阿武隈小学校　六年　岡部　広哉

夏休み、久しぶりに
会った祖父母。
いつの間にか二人の身長
をぬかしていた。
あいかわらずの笑顔で祖
母が言う。
「今、私がしてあげられる
ことは何でもしてあげる。
そのかわりに、大人に
なったら、お母さんに恩
返しをしてね。」
おばあちゃん、まかせて。

お母さん大すき

郡山市立富田東小学校　三年　林　咲空

ぼくのお母さんが作るハンバーグは、食べると中から肉じゅうがジュワっと出てきてとてもおいしいです。ケチャップのソースや大根おろしのソースでたくさん作ってくれます。夕ごはんに家族でハンバーグを食べている時、お母さんが「咲空はどんな時がうれしい？」と聞いてきました。うれしい事はいろいろあるけど、「一番は、お母さんのだっこ」と言ったら少しはずかしくなりました。

福島県青少年赤十字賛助奉仕団委員長賞
「いのちの詩・愛の詩」
郡山市立富田東小学校　三年　林　咲空

ぼくがうれしいこと
宿題が少ない時
夕ごはんがハンバーグの時
お兄ちゃんとなかなおり
した時
テストでほめられた時
ごほうびをもらった時
でも一番うれしいのはね、
お母さんがわらってだっ
こしてくれた時なんだ。

受賞された皆さん

日本赤十字社　社長賞
「わたしのふるさと」
郡山市立富田中学校　一年　志田　柚季

日本赤十字社　福島県支部長賞
「いのちの詩・愛の詩」
白河市立白河南中学校　二年　渡邊　凜
「わたしにできるボランティア」
郡山市立富田東小学校　四年　大槻　惺
「わたしのふるさと」
郡山市立富田東小学校　一年　須藤　琉華
「わたしが感動したことばやできごと」
学校法人松韻学園福島高等学校　一年　紺野　美礼

青少年赤十字福島県指導者協議会長賞
「わたしが感動したことばやできごと」
須賀川市立阿武隈小学校　六年　岡部　広哉

福島県青少年赤十字賛助奉仕団委員長賞
「いのちの詩・愛の詩」
郡山市立富田東小学校　三年　林　咲空

学校賞
郡山市立富田東小学校

学校奨励賞
伊達市立堰本小学校
郡山市立片平小学校
須賀川市立稲田小学校
相馬市立磯部小学校
双葉町立双葉北小学校
白河市立白河第二中学校

フィリピンユースメンバー福島訪問　11/13~18

日本赤十字社福島県支部国際交流事業

令和元年度福島県青少年赤十字国際交流事業として、フィリピンユースメンバーを福島に招待しました。平成二十九年度に続き、二回目となります。今年度は五名のメンバーとスタッフ、指導者の七名が福島を訪れました。

招待の目的は青少年赤十字のメンバーとの交流を通して互いに理解を深めることに加え、間もなく九年目を迎えようとしている東日本大震災の被害と復興に向けての取組を実際に感じてもらうことにあります。

学校訪問では、猪苗代高等学校と会津学鳳高等学校を訪問し温かいおもてなしを受けました。猪苗代高校では数学と音楽の授業に参加し、また調理実習ではだし巻き卵に挑戦しました。ＪＲＣメンバーとも折り紙などで交流し、お別れ会ではフィリピンの民族衣装に身を包んだメンバーが伝統のダンスを披露しました。

会津学鳳高等学校では、英語の授業やＬＴＨＲに参加し、また、同校中学校の生徒の案内で部活動の見学や体験をすることが出来ました。なぎなたや弓道、書道など日本の伝統文化にメンバーは興味深々で積極的に体験する様子も見られました。

三春の県環境創造センター『コミュタン福島』では、原発事故や福島の美しい自然の映像に触れ震災や福島の現状について理解を深めました。

出発にあたり「なぜ福島に行くの？」と聞かれたというメンバーもいて、福島の美味しい食べ物や自然についてフィリピンの人たちに伝えたいと力強く語ってくれました。

会津地区を中心に訪問した今回は、日新館や鶴ヶ城など会津ならではの地を巡ることが出来ました。日新館では「什の掟」や武士道に深く感銘を受け、鶴ヶ城では会津の歴史についてボランティアで案内してくれた高校生と一緒に学ぶことが出来ました。

当初の予定より、二日少ない日程でしたが明るく積極的なメンバーはホームスティ先の皆さんとも交流を深め、その温かいおもてなしに感動し、忘れがたい思い出を作ることが出来ました。今後もこの交流が継続することを希望します。

2019年度福島県国際交流事業“フィリピンメンバー福島訪問”日程

	１日目	２日目	３日目	４日目	５日目	６日目
月日	11月13日	11月14日	11月15日	11月16日	11月17日	11月18日
曜日	水	木	金	土	日	月
6	13日 19：00 マニラ発 PR424便 14日 0：30 羽田着 14日 1：00 羽田発 チャーターバス					起床・朝食・チェックアウト
7		安積 PA にて朝食	起床・朝食	起床・朝食	起床・朝食	ホテルのバスで移動
8			会津学鳳高校発 8：30	東横イン会津若松駅前 9：00集合	ホテル発 9：00	
9		猪苗代高等学校 10：00～	会津日新館 9：00～11：30	コミュタン福島 10：30～12：30	会津若松市内 鶴ヶ城等	成田発　9：30 PR431
10						
11						
12		昼食（調理実習）	昼食	移動・昼食		
13		猪苗代高等学校発 15：00 移動	会津学鳳高等学校 13：00～17：00		昼食	マニラ着 13：40
14				14：30 平時災害救護発祥の地記念碑見学	移動14：00	
15						
16		16：00 会津学鳳高校着 ホームスティ先との打ち合わせ				
17						
18			それぞれのホームスティ先	お別れ会 田季野 17：00～19：00		
19		それぞれのホームスティ先			夕食	
20						
宿泊		ホームスティ（会津）指導者 東山温泉月のあかり	ホームスティ（会津）指導者 東山温泉月のあかり	東横イン会津若松駅前	ホテルマイステイズプレミアム成田	

出会いに感謝

福島県立会津学鳳高等学校　一年　武藤　百美

私は、あの時の小さな勇気でかけがえのない出会いを手に入れることが出来ました。

「ホームステイボランティア」

この言葉を先生の口から耳にした時、私の心は高鳴りました。以前から外国人の方と関係を築けるようにと願っていた私にとって、うってつけな機会だと思ったからです。大きな不安により諦めようと思っていたのですが、最終的にホームステイを受け入れるという決断を下しました。私が受け入れたのは、笑顔が素敵なフィリピン人の女の子、ジョアンです。最初は緊張していたものの、少しずつ打ち解けられているということに喜びを感じていました。私たちは、日本食を食べたりトランプで遊ぶなどして交流を深め、お別れした後も連絡を取り合う仲にまでなりました。

ジョアンと私

私がホームステイを受け入れる日の少し前、フィリピンは台風により甚大な被害を受けました。知られている通り日本は災害大国で、私たちはそのフィリピンがおかれた境遇を理解することが出来ます。そのため、より一層二国間での支え合いは大切になってくると思います。また、ジョアンが「ＴＳＵＮＡＭＩ」を理解していることを知り、その学習意欲に感動を覚えました。そして、他国についての学びを自国の学びとし、より良い未来が築けるのではないかと考えました。ジョアンは、私に自身のことだけに固執せず、大局的に周りから学ぶことの大切さを教えてくれました。

私とジョアンは、育ちも国の文化も言語も違いますが、短い間でも一つ屋根の下で生活を共にしたことで、その違いを学べたことが興味深かったですし、それを理解することで私の視野も広がりました。この経験を通して、もっと他国への理解を深めたいと思えたのでこれからもその向上心は忘れないようにします。貴重な機会を与えてくださった全ての方々に感謝致します。ありがとうございました。

福島の皆さんへ

フィリピンユースメンバー　バウティスタ・ミカ

この活動全体を通して私は特に日本の文化を学びました。

第一は学校です。

私たちフィリピンの学校と日本の学校には「たくさんの違いがありました。

日本の学校におけるカリキュラム、先生の生徒たちへの教え方や生徒間で互いに教え合うことなどです。

第二は家族です。

ホームステイ先で、ホストファミリーの方々は、日本の伝統的な文化を教えてくれました。彼らは大変もてなしてくださって親切でした。また、私が気付かなかったしてはいけないことなどのいくつかのマナーを学びました。幾つかの雑学的知識も与えてくれました。例えば、着物（浴衣）は夏の衣服であるということなどです。

最後に福島の歴史についてです。そこから多くの事を学びました。

先に福島で起こったことは悲しいことだと思います。しかし、私は人々が自分たちと町の復興のために、互いに助け合っていることを知ってとても嬉しくなりました。

私が本当に多くの事を学びたいと思っていた、放射線や対策について教えてもらうことが出来ました。

日本の文化は私たちのものとは異なっているかもしれません。しかし、私たちは互いを理解し尊敬しあうことによって、その違いから多くの事を学び得られると思いました。この素晴らしい経験を与えて下さってありがとうございました。そして、私たちが、またこのような機会が持てることを希望しています。ありがとうございます。

あとがき

小さな勇気が、かけがえのない出会いに繋がる。勇気を出して一歩踏みだすことで、新たな自分を発見することが出来ると思います。

会報作成にあたり、ご多忙のところ原稿をお寄せいただいた皆様に感謝申し上げます。